

ハマグリ資源回復の取り組み

三重県桑名市にある赤須賀漁業協同組合(以下、赤須賀漁協)の漁場は木曾三川(揖斐川、長良川、木曾川)の河口域や河川内です。そこでは小型機船底引き網でハマグリ、ヤマトシジミ、アサリなどの貝類を水揚げしたり、冬季には海苔養殖、春先にはシラウオ漁を行ったりしています。かつてはイワシ、ボラ、クルマエビやアナゴなども漁獲していましたが、高度経済成長期に埋め立てや干拓地造成、取水による地盤沈下、火力発電所からの温排水、河川開発などが進行し、魚類を対象とした漁船漁業が衰退しました。

桑名市の名物であるハマグリは、昭和40年代(1960年代後半から70年代前半)までは水揚げ量が2,000~3,000トンほどありました。しかし、昭和51年(1976年)ごろから水揚げ量が急激に減少しました。そして平成7年(1995年)には1トン未満となりました。

水揚げ量が減少するなか、漁業者は昭和50年代(1970年代半ば)から種苗放流に取り組みました。また漁業者による操業日数や漁獲制限などの資源管理などにも取り組みました。しかし埋め立てや干拓地の造成、地盤沈下によるハマグリの生息地の消失の影響は大きく、資源回復はなかなか進みませんでした。

そうしたなか平成5年(1993年)に転機が訪れました。それは長良川河口堰の建設に伴い、建設省(現国土交通省)が約20ヘクタールの城南沖人工干潟を造成したことです。この人工干潟が造成されたことでハマグリが徐々に回復するようになり、平成26年(2014年)には216トンの水揚げ量となりました。これまで沿岸域や陸域の開発による漁業者への影響は、補償金が支払われることで解決されるのが一般的ですが、私たちは「一度失われた海は決して戻らない」ということを建設省の出先事務所の方々に繰り返し伝えてきました。このことが資源回復につながったことは大変幸運であったと思います。

一方、赤須賀漁協青壮年部研究会では日々、干潟の環境や稚貝の発生状況などのモニタリングを継続的に実施しながら、資源管理の進め方などの議論を行って

います。また子どもたちを含めた地域住民に対し、漁業や漁場環境を守ることの大切さを理解してもらう取り組みも行っています。具体的には小学校の給食へのシジミの提供、市内小学校への出前授業、ハマグリ種苗放流や干潟の観察会、漁船に乗る操業体験などです。

加えて木曾水系の上流域にある岐阜県東白川村との交流もしており、東白川村の子どもたちが赤須賀を訪れて干潟観察会を行ったり、桑名市の小学生が東白川村を訪れ、植林活動を行ったりするなど、青壮年研究会が交流の橋渡し役を行っています。

ハマグリは現在、資源が回復基調にありますが、平成25年(2013年)ごろから今度はシジミの資源量が減少するようになりました。原因は河川の上流にダムや河口堰が整備され、産卵場となる場所で砂が失われてきているからです。

現在、地球温暖化が大きな問題となっていますが、その一方で沿岸域や陸域の開発が海洋環境に大きな影響を及ぼしていることについては理解が進んでいません。漁業者は海洋環境を守るため懸命に努力をしていますが、それでも漁業者だけでは解決が困難なこともあることを、国をはじめ、行政機関にも理解していただきたく思います。「未来の子どもたちに豊かな海や川をつないでいきたい」という思いを国の方々にも共有していただき、政策を進めて頂きたいと考えています。

(赤須賀漁業協同組合 組合長 水谷隆行・みずたに たかゆき)